
珈琲

快流緋水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

珈琲

【Nコード】

N0212F

【作者名】

快流緋水

【あらすじ】

あの人との別れ。あの彼と出会い。知らなかった関係。まさかの告白。どれもが私を混乱させていた。

第1章 別れ

小柄な女性は隣の男性を起こさぬよう、ゆっくりとベッドから起き上がってすると降りた。その足でバスルームに行き、熱めのシャワーを出して浴びる。気だるい身体に熱が触れ、ほっと息をついた。しかし、その次に出したのは涙であった。

白川蓮美しらかわはすみは何度も深呼吸をして心を落ち着け、顔をしっかりと冷やしてからバスルームを出た。

隣で寝ていた男性、真田賢司まなだけんじはまだ起きていなかった。それを見て安心し、それから昨日と同じようにスーツを着こなし、化粧をした。鏡を見てにこつと微笑むと涙のあとはなく、腫れた目もなく、いつもの蓮美がいた。

時計を見ると、もうじき7時である。そろそろ賢司を起こさないといけない。蓮美は鏡に向かってもう1度微笑み、それからベッドに腰掛けた。穏やかな寝顔を見て、起こすのは申し訳ないように思えてくるが、仕方がない。今日は仕事日だ。

『賢司さん、朝ですよ。』

賢司は肩を揺すられて嫌そうに寝返りを打つ。これはいつものことである。今まで1度で起きたためしがない。それを思っ、て蓮美は苦笑し、今度は肩を叩く。

『賢司さん、起きて下さいな。』

何度も叩かれるうちに、賢司もうつすらと目を開け、蓮美を見る。そして、そつと彼女を引き寄せて頬にキスを送った。

『おはよう、蓮美。』

『おはようございます。』

お返しのように、蓮美も賢司の頬にキスをする。

『もう着替えていたのか。』

あくび交じりに言い、賢司は蓮美からタオルを受け取る。がっしりとした大きな手は、蓮美をいつも包み込んでくれる。

賢司がシャワーを浴びている間に、簡単な朝食を準備する。フレンチトーストと目玉焼き、サラダ。質素ではあるが、このくらいしか出来ないのだ。

ここのマンションには、アンティークの応接セットに大きな液晶テレビ、ふかふかのダブルベッド、という具合に家具は良いものばかり揃っているのだが、調理道具はほとんどない。それは、賢司自身が調理する気はなく、このマンションも生活をするためというより、寝るための部屋となっているからである。かろうじてあるフライパンや包丁、まな板などは、蓮美が持ち込んだものであった。

シャワーを浴びて戻ってきた賢司はスーツに着替え、ソファーにネクタイを置いた。それから珈琲豆を挽き、メーカーにセットする。この作業だけは、蓮美はしなかった。彼のこだわりである。

珈琲が出来上がった頃、テーブルに朝食を並べる。こうして向き合って食べる時間も、大切なひと時である。

『ブラックでいいか？』

いつものようにそう言いながら、賢司は蓮美に珈琲を渡した。それを受け取りつつ、蓮美は笑みを浮かべる。

『ミルクを入れたらもったいないって言うでしょう。それに、あなたの珈琲はブラックが1番って分かったから、何も入れませんよ。』
『そうか。』

『ええ。じゃあいただきます。』

『いただきます。』

手を合わせて挨拶をし、まずは珈琲を口に含む。苦さも酸味も薄い、さっぱりとした飲み口が心地よい。フレンチトーストとサラダを食べ、穏やかな1日が始まる。

食後にもう1杯それぞれ珈琲を飲み、応接セットのソファでくつろぐ。こうした出勤前の落ち着く時間はゆっくり流れていく。

蓮美はバッグから鍵を取り出し、テーブルにコトリと小さな音をたたせて置いた。それを見て、賢司はとても驚いた。音をたてないように気をつけながらカップを置き、鍵と蓮美を交互に見る。

『どういうことかね？』

今まで聞いたことのないほど上ずった声であった。

蓮美は視線を落とし、それから賢司を見た。白髪混じりでも、少し日に焼けた顔と、精力的なオーラのあるその姿は若々しく、いつ見ても惚れ惚れしてしまう。だが、今はその顔には驚きが広がっていた。

『どうしようか迷っていたんです。でも、辛くなる前に、別れがもっと辛くなる前に、こうした方がいいと思って。』

涙が今にも溢れそうな、そんな目で見つめられ、賢司は言葉が出なかった。

『今も好きです。でも、周りに知られる前に、こうした方がいいと思つて。』

蓮美はうつむき、慌ててバッグからハンカチを取り出して目に当てた。

『ごめんなさい、泣くつもりはなかったんですけど。』

あの時と同じように深呼吸を何度もし、それから顔を上げた。赤い目で見つめられ、賢司は肩を落とす。

『このマンションのことは家族も知らん。もちろん、会社の者もだ。管理人も私たちのことは何も知らない。私だけがいると思つて、それでも安心してはくれんのか？』

『配慮してくださったのは凄く嬉しいです。』

『じゃあ、好きな人でも出来たのかな？』

蓮美は首を振る。賢司の温かい性格と魅力溢れるオーラに勝る人には出逢つていない。

『誰かに聞かれたのかい？』

優しく問いかける賢司に、蓮美は胸をきゅつと詰まらせる。

『いいえ。誰にも知られていないはずです。』

『じゃあなぜ？』

賢司がここまで執拗に言うのは珍しく、それだけでも蓮美は胸がいっぱいであった。だが、もうこの関係は終わった方がいいのだと思

っていた。

蓮美と賢司は不倫関係であった。秘書と、取引会社の社長という間柄から、音楽を通して仲が深まり、こういう秘密の関係になったのだ。それはもう1年以上経っていた。今、蓮美は27歳、賢司は54歳。親子ほどの年の差はあるのだがお互い気にせず、こうしてマンションで会う密事を楽しんでいた。

だが、こういう関係はそう長くするものではない。賢司には妻子がいるのだから。

蓮美は鍵を取り上げ、再度賢司に差し出した。

『今日でおしまいにしましょう。』

『蓮美。私は君と別れるつもりはない。』

断固たる声に、蓮美はゆっくりと頭を横に振った。

『賢司さんのことは好きです。ただ、続けていったら良くないでしょう？』

不倫は世間体に良くない。もし誰かにばれてしまったら、家庭も会社も巻き込んだ問題となってしまう。大事になる前に、終結させることが必要なのである。

また言外に、離婚して私と結婚するつもりもないのでしょうか、と込められていた。

賢司は眉間にしわを寄せて考えていたが、深くため息をつく、蓮美から鍵を受け取った。

『君に何かした方がいいな。』

『いいえ。』

蓮美は泣いているような笑顔を見せる。

『賢司さんとの思い出がなによりです。』

賢司は切なそうに手を差し出す。それを蓮美も受け取って、握手をした。

『ありがとう、蓮美。』

『こちらこそ、ありがとうございました。さようなら、賢司さん。』
時間を刻む秒針の音がするのが憎いくらい、手を離すのが惜しかった。

た。

第2章 あの席で

白川蓮美が真田賢司と別れて3ヶ月経った。その間、蓮美が取り乱したことは1度もない。いつもきつちりと長い黒髪をひとつに結び、社長について滞りなく仕事をこなしていた。賢司は取引先の社長でもあるから会わずにはいらなかったが、表情を表に出さないのは2人とも慣れていた。何事もなく、白が過ぎる。

ただ、心の中では一抹の寂しさが燦っていた。納得して別れたとしても、愛する人との別れは辛いものだ。それを誰かに話して気持ちの整理が出来ればいいのだが、それは叶わないことであり、そうして偏見を持たれたくもなかった。

土日に出勤の多い蓮美は、平日に休みをもらって過ごしていた。今日は2週間ぶりの休み。梅雨に入ったので雨の休日だと思っていたが、朝から太陽が顔をのぞかせていた。久々に見る青空で天気よく、たまった洗濯物をスッキリ乾かせそうだ。窓を全開にし、梅雨の晴れ間なのに乾いている空気を通し、午前中いっぱい掃除をした。隅々まで掃除をすると、気持ちまでスッキリしてきた。良い1日になりそうである。

午後、気になっていたイタリアンレストランでプチ豪華なランチをとってスタートする。それからショッピングを楽しみ、蓮美は洋服をまとめ買いして自宅配送を願い、その後本屋へ向かった。

本は以前から好きで、ジャンルを問わず好みのものを探し出しては読んでいた。今は写真集にはまっていた。主に自然を写した写真集が好きで、家の本棚のひとつは海や空などの写真集で埋まっていた。

写真集のコーナーに立ち入って早速ページをめくる。今まで買っていない物から新刊まで、気になった写真集を端から端まで手に取る。本を痛めつけないよう丁寧にめくり、好みのものをチョイ

スしていく。

2時間ほど掛けて選んだ写真集6冊をレジに持って行き、1冊だけ持ち帰りにしてあとは無料配送にもらった。支払いが済むと、写真集を持って行きつけの喫茶店に入る。

この喫茶店は珈琲が美味しいことで有名で、お茶菓子のようにドーナツが付いてくる喫茶店であった。珈琲好きの賢司と、仕事以外で初めて会った喫茶店でもある。偶然この喫茶店で会い、そこからスタートしたのであった。

蓮美がカウンターに座ると、何も言わずにマスターが珈琲を用意し始めた。常連のお好みを全てインプットしているマスターなのだ。そういうところも、ここに来なくなる理由であった。

数分して珈琲の香りが鼻をかすめ、マイセンのカップに入れられた珈琲とドーナツが差し出された。ミルクと砂糖は付いていない。賢司の珈琲を飲むようになって、すっかりブラック派になってしまったのだ。それを思い出して苦笑し、珈琲に口をつける。ほろ苦い風味が口に広がる。

『美味しい。』

ただそれだけの呟きに、マスターはにっこりして下がった。

マスターが下がったのを見て、蓮美はバッグからさっき買った写真集を出した。屋久島の写真集である。文庫本ほどの大きさなので、これからどこかへ行くときに、お供になれそうだ。

しばし見入っていると、隣に男性が座ってきた。蓮美より先に来ていた客で、座っていたテーブルから自分でカップを持ってきたようである。この不自然な行動に蓮美は顔を上げた。

『あ、邪魔しちゃいました？』

栗色の髪の、少し日焼けをした細身の男性があっさり言ってきた。あまりに飄々としているので、蓮美の方が面食らってしまった。

『あ、いいえ。あの……。』

続けることが出来ず、しどろもどろになる蓮美を見て、彼は微笑んだ。笑う顔を見て、少しだけ暖かな気持ちになった。

『その写真集、僕が撮ったんですよ。』

イキナリのこと過ぎて、蓮美はぽかんと口を開けてしまう。それから手にしている写真集を閉じて表紙を見る。原始的な大木の表紙は、この男性とはかけ離れている気がした。

『これを？』

少し疑うような口調で聞くと、男性は気にした様子もなくうなずいた。

『そうです。』

そう言うと、彼は名刺を差し出してきた。青地の柔らかそうな紙に、<REN>という名前が真ん中に書かれていた。下の方に住所と電話番号、そして注意事項として、携帯電話がなくても気付かない場合があるのでご了承ください、と書かれている。印刷された文字だが、なんとなく個性がにじみ出ているような名刺だ。それを見てからもう1度写真集の表紙を見る。そこにはちゃんと写真家・RENと書かれていた。

『RENさんですかあ。』

ようやく信じた蓮美にRENはにっこり笑った。

『はい。』

『じゃあ私も。』

名刺交換をする癖がついた蓮美は、いつものように名刺入れに名刺を載せて手渡した。会社の名刺だが、薄い緑の名刺は白い名刺より爽やかで個人的に気に入っているからいつも持ち歩いていたのだ。

『へえ。』

RENが不思議そうに見た。

『奇遇ですね。』

『え？』

今度は蓮美が不思議そうに蓮を見る。

『RENっていうのは本名なんですけど、字は蓮美さんの蓮の字なんですよ。僕の場合は、れん、って読むんですけどね。』

『そうなんですかあ。かつこいい名前ですね。』

素直に出た言葉に、蓮は少し照れた。

『名前負けしないように頑張ってますけどね。』

『名前負けなんかしていませんよ。』

蓮美ははしゃいで写真集をぺらぺらとめくる。

『この屋久島の、すっごくいいですよ。ぱつと見て、これは買わなきゃって思ったんです。どのページも、そこで見ているような感じがして素敵ですよ。』

『どうも。サインでも書きましようか？』

照れ隠しに言っただつもりが、蓮美はちゃっかり写真集とボールペンを差し出した。蓮はびっくりしてしまっただが、それでもボールペンを受け取って表紙の裏にRenと筆記体でサインした。

『サインって言っても、こんなですいません。』

自分が言ったこととやったことに恥ずかしそうに笑みを浮かべていたが、蓮美は満足したように大事に写真集を撫でた。

『いいえ、嬉しいです。大事にしますね。』

『ありがとうございます。なんかすいません、自分が撮ったのを持っているから、つい声を掛けちゃって。』

すまなそうに頭をかく蓮に、蓮美は笑顔で首を振る。

『お目にかかれるとは思わなかったから、凄く嬉しくて。こちらこそ、ありがとうございます。』

蓮美は丁寧に頭を下げた。

次の日の夜、蓮美はさっそく蓮に感想の手紙を送った。自宅配送にしておいた写真集の中にもう1冊RENの写真集があり、それについてもびっしりと感想を書いていた。それから、蓮は駅2つほどしか離れていない所に住んでいることに気づき、蓮美の自宅住所と携帯電話の番号も書き込んでおいた。

意外にも、5日後、蓮から電話が掛かってきた。あり得ない、と思いつつ携帯電話に登録していた蓮美にとっては嬉しいサプライズ

だ。今度撮影に色々なお城を巡ることや、次に出る写真集などをたづぷりと話し込んだ。

『人物は撮ったりしないんですか？』

『まれにあるけれど、苦手なんですよね。まだまだ未熟なんで。』

『あんなに綺麗に取れるのに。』

軽く笑う声が蓮美の耳に入った。

『そんなことないですって。だって駆け出しの22歳の写真家ですよ。』

『え！？』

蓮美は驚いて声を上げる。それを聞いて、蓮は笑い出した。

『そんなに年寄りに見えたんですか？』

『いや、そういうことはないけど。』

慌てて言い、蓮の顔を思い出す。少年っぽいような目をしていたが、顔は年齢よりも大人びている。

『じゃあ何歳に見えていたんですか？』

蓮は空中を眺めて考える。

『25歳くらいですね。』

『じゃあ蓮美さんと同じくらいってことですか？』

この返しには思わず笑みが浮かんだ。

『あ、若く見えるって言うてくれてありがとう。』

『え？』

そう笑って返すと、今度は蓮が驚いて声を上げた。

『今一応27歳なのよ。』

『え、見えなかったですよ。まあ若く見えた方がいいですよね。』

『そうですね。それにしても凄いですね、22歳で写真家なんて。ほかの写真家さんはもっと年齢が上でしょう？』

『ん、そうですね。まあ賞を取れたりして、運が良かったんですよ。』

おどることなく、ありのままの蓮の言い方が、蓮美は気に入った。

『ねえ、丁寧語じゃなくていいですよ？』

急な話題転換に、電話の向こうでは戸惑っていた。

『上下関係があるって言うわけじゃないし、気楽に話しましょうよ。』

それを聞いて蓮は笑い出した。

『じゃあ蓮美さんも丁寧語禁止ね。』

早速口語に変わった蓮に言われてしまった。

『丁寧語でした？』

『ほら。』

『あ。』

『蓮美さんから言い出したんだから、しつかりね。』

口語になったとたんに、蓮の人柄が変わったように思えるが、これが普段の姿なのである。蓮美はその変わりように微笑んだ。その素の姿が嬉しかった。

『そうね。分かったわ。』

あの時声を掛けられ、まさか写真家だとは思わず、こうして関係が続くとも思えなかった。それだけに、蓮美はこうして親しく話せるだけで嬉しかった。蓮としても、今まで見えなかった読者と真正面に見ることが出来、新たな刺激にもなっていた。

第3章 あいていますか？

蓮と出会って半年。季節はすっかり逆となり、寒い日が続いていた。街はクリスマス色に染まり、夜になればイルミネーションが輝いている。

この半年、意外にも連絡を取り合うことが続いている2人。蓮が撮影のために海外にいるときもあれば、白川蓮美の出張先と撮影地が重なって、同じ土地にいながら電話していることもあった。たまに時間が合えば食事にも行こうと話しているが、まだそういう機会はこの半年で2回しかなかった。写真家と一読者。たったそれだけの関係だったのに、こうも繋がると思議なものである。

クリスマスで浮き足立っている街中を車が走っていく。運転しているのは藤代社長である。本来ならば運転手か、もしくは秘書である蓮美が運転するべきなのだが、藤代社長は頑として譲らない。何度頼んでも断られ、ついには蓮美が諦めたのだ。

運転しているのは発売されてすぐに買い換えたレクサス。車体が好きなのかと言えばそうではなく、自新しいのと運転が好きなのである。だから、レクサスを買うときも色や装備はほぼ蓮美が決め、その後藤代社長の手に渡ったのだ。

『クリスマスの予定は？』

7年間も秘書をしていれば、他人の前ではかしこまっていなくても、2人だけのときはくだけている。藤代社長はハンドルを握って嬉々としている表情で聞いてきた。

『仕事ですよ。』

当たり前のように答えると、藤代社長は笑った。

『今年は平日だったか。』

『そうなんですよ。』

『でも、夜は何かあるだろう？』

ここまで聞いてくる藤代社長も珍しい。蓮美はちらりと横を見て、クスリと笑む。藤代社長は42歳の独身。結婚歴はない。見た目も若々しく、30代半ばに見える。それだけに、社内 of 女性社員の中には秋波を何度も送る人がいる。だが、仕事は鋭いが、そちら方面の鈍い社長は一向に気付かない。

（社長はどうなのかな？）

『残念ながら、何もありませんよ。』

そう思いながら答えると、意味ありげに微笑まれる。

『ここ数ヶ月華やかな感じになったように思えるが、それでもいいのか？』

今までの恋愛…真田賢司との不倫…はひた隠しにしてきた。誰1人打ち明けていない。それだけに、社内ではフリーを装い、賢司と会う前後は気持ちを出さないように非常に気を遣っていた。ただ、今は恋愛ではないとはいえ、蓮との連絡の取り合いに心弾んでいた。電話やメールがあればウキウキとし、逆に音沙汰なしの日にちが重なる寂しくなっていた。隠す必要のない関係だから何も気を遣わなかったが、藤代社長にまで気付かれるとはそうとう表情が出ていたと言ったことだ。

（誰にも言われなかったから安心していただけ、陰で噂されてたりして。）

蓮美は自然と照れる。

『そんな風に見えました？』

『ああ。春が来たのかと思ったんだけど。それで、予定はどうなんだい？』

『夜だって何もありませんよ。からかいがないでしょう？』

笑って返すと、藤代社長は声を出して笑った。

『違ったのか。』

『そういう社長はどうなんですか？』

今まで独身で来て、それ相応の恋愛だってしてきていると見られる藤代社長は軽く頭を振った。

『遅れそうだから、スピードを上げる。』
面白くない返事をし、運転に集中した。

家に帰り、ポストから取って来た手紙を見る。請求書と通販のダイレクトメール。その間に分厚い手紙が挟まっていた。宛名の字を見て、蓮美は破顔する。

『蓮さんからだ。』

その他の手紙をテーブルに放り投げ、蓮からの封筒をはさみできれいに切って中身を出す。

『わあ。』

中ものを見て感嘆の声を上げる。中に入っていたのは、写真であった。写真は全て、街中のイルミネーション。ニュース内でも流れるようなものから、住宅に飾っているものまで。全国のイルミネーションが写されていた。

『綺麗。』

一般の人でもイルミネーションを綺麗に撮るコツなどを知れば、程よく撮れるものだ。だが、それと比べては失礼なくらいくつきりとそれでいて幻想的に写っていた。

（駆け出しの写真家って言うくせに、腕前は若手と思えないわよ。）
写真と一緒に入っていた便箋には、イルミネーション特集のために撮ったことや、それに採用されなかった写真を蓮美にプレゼントすることが書かれていた。

『これが没って言われたの！？』

どこが悪いのかと聞きたいくらいの写真を見る。これらが没ならば、採用された写真はどれほどなのか、気になるものだ。

20枚近くある写真から良いものを2枚選び、写真立ての写真と入れ替えた。今まで昼間の写真だったので、ぐっと雰囲気が変わった。その様変わりに笑みがこぼれる。

『嬉しいわ〜。』

蓮美はバッグを漁って携帯電話を取り出し、早速お礼の電話をかけ

た。だが、生憎でなかったのだから、メールでお礼をすることとなった。
（名刺の注意書きは大事ね。）
あの注意書きを思い出しながら、もらった写真の感想を感動したまま打っていった。

次の休みの日。蓮美は思いがけないプレゼントのお返しを買いに行った。何にしようか散々悩んで選んだのは、貝や翡翠などから出来ている地球儀の置物。6色ある中から、蓮に似合う瑠璃色の地球儀に決めた。前から気になっていたもので、自分にもワンサイズ下の地球儀を買い、ご機嫌で家に帰った。

蓮への手紙を添えて配達してもらい、自分の地球儀はベッド脇のテーブルに置くことにした。回すときらりと光る部分もあったりして、小さいながらも映える。隣にもらったイルミネーションの写真を並べると、同じ濃紺が合って綺麗であった。

クリスマス。仕事を終え、会社で藤代社長を見送ってから退社となった。デパートの地下の惣菜売り場に寄り、今晚のおかずを物色する。クリスマスのせいで、ローストチキンとクリスマスケーキを売る声がけたたましい。そして、人の多さにも嫌気がさし、蓮美は何も買わずに電車に乗った。

（何があったかなあ？）

冷蔵庫の中を思い出しつつ、何を作ろうかと悩んでいると、ぽんと軽く肩を叩かれた。

『蓮美さん。』

びっくりして振り向くと、そこには蓮が立っていた。

『こんにちは。』

夜なのに疲れた顔などなく、爽やかに挨拶され、なんとなくホッとする蓮美。

『こんにちは。仕事帰り？』

『うん。蓮美さんもでしょ？』

『そよ。』

『これからデート…なわけないか、疲れた顔してるし。大丈夫？』
あつさり否定されたことに複雑な思いを抱くが、顔色を見て心配してくれた方の嬉しさが勝っていた。

『ありがとう。大丈夫よ。』

『そつか。ね、ご飯食べた？』

『まだだけど。』

『じゃあさ、一緒に食べようよ。蓮美さんちの方でさ。だめ？』

（ダメなわけないじゃん。）

蓮美の顔に自然と嬉しさが広がる。

『いいよ、一緒に食べよ。何系がいい？』

『ん、今日はさ、クリスマスでどこも混んでいるだろうから、空いている所でいーんじゃない？』

蓮美は驚いたような表情を浮かべた。

『どうした？』

『そついえばクリスマスだったね。』

あまりに間の抜けたセリフに、蓮は笑いをこらえるのが苦しかった。
電車の中ではなく自室であれば、大きな声で笑っていただろう。

『世間に無関心すぎない？秘書でしょ？』

ずばりツツコミを入れられ、蓮美は言い返せなかった。

『はい、すみません。』

『まあいいって。』

そう言いながらも、まだ笑っている蓮であった。

蓮美のマンションの最寄り駅に降り、適当に歩いてみる。飲食店の前には貸し切りの看板や、待ち時間の看板が出されていた。

『どこも混んでるね。』

『うん。じゃあさ、うちで食べない？』

この誘いに、蓮は目を丸くした。

（それって…？）

『混んでてうるさい所で食べても嫌じゃない。うちなら静かだし。』

たいしたもの作れないけどね。』

『本当にいいの？』

『だってご飯だもん。そのくらいいいって。』

蓮は首を小さく傾げつつも、笑ってうなずいた。

『じゃあご馳走になりまーす。』

『はいはい。そうしたら…パンだけ買っっていこうかな。』

ちょうど目の前の、閉店間際のパン屋に入った。

蓮美のマンションに着き、蓮は珈琲を入れてもらい、ソファアに座って待っていた。蓮美は大急ぎでありあわせの具材でホワイトシチューを煮込み、サラダとツナのオムレツを作ってプレートに乗せた。食材があつたことに感謝しつつ、急ごしらえの簡単な料理が出来たことにも心の中で感謝する。

『疲れてるのにごめんねー。』

『いーのよ。味は保障しないけど。』

『あはは！そりや楽しみだね。』

蓮美は大慌てで作ったシチューをよそい、テーブルに持ってくる。

『飲み物、紅茶か珈琲しかないんだけど。シャンパンとか買ってくれば良かったね。』

『いーよ。僕は珈琲残ってるからへーき。』

蓮はソファアから食卓テーブルに来て、メニューを見て嬉しそうに笑った。

『美味しそうじゃん。』

『口に合えばいいけど。どうぞ座って？』

『ありがとう。』

向き合って座り、何とはなしに

『メリークリスマス！』

と言った。もちろんクリスマスチャンでもないが、なんとなくそう言いたかった2人であった。

『じゃ、いただきます。』

『どうぞ召し上がれ。』

蓮はシチューの具材をスプーンいっぱいに載せて頬張った。

『美味しいじゃん。』

『よかった。』

ただ単純に、思ったことを口にしてくれて嬉しい蓮美。自然と笑みがこぼれる。蓮にもそれが伝わり、微笑み返す。

特別なことはないけれど、お互い笑って食事が出来る。この時間と空間に幸せを感じていた2人であった。

第4章 意外なところで

クリスマス後は何事もなく過ぎ、仕事に追われながら年が締めくくられた。新たな年第1日目は、晴れ晴れとした気持ちの良い、しかしキーンと冷えた日であった。凍える手をさすりながら、白川蓮美は郵便ポストまで歩いた。近年遅れがちな年賀状は、例年にないくらい早く着ており、すっかり冷えていた。

束になっている年賀状を大事に持ち、暖かい部屋に戻る。用意していた珈琲はすっかり出来上がって湯気が漂っていた。マグカップにたっぷり入れ、ソファに座ってまずひと口飲む。その後、年賀状を1枚ずつ丁寧にみる。学校の友達や会社の同期から、会社の上司や取引先の会社で知り合った人から来ていた。取引先の会社として、真田賢司からも来ていた。もちろん、会社で作った年賀状だから決まり文句が書かれているのだが、最後に手書きで、元気に過ごしているようで安心している、とだけ書かれていた。その心配りに、やはり好意を消すことは出来ないと思っていた。ただ、その好意が徐々に恋人としてよりも、尊敬する人として変わっていた。蓮美も賢司に送っていた。会社にも送ったが、プライベートとして、内容が読み取れないように異例の封書で年賀の挨拶を出していた。

友達の中にはすでに結婚をして子どももいる人もいたので、家族写真の年賀状もあった。抱っこされている子どもは本当に幸せそうに笑っている。笑い声まで聞こえてきそうなその笑顔に、羨ましさを感じた。

手書きやプリント、色々な年賀状を見て楽しみ、最後の1枚となった。それは、蓮からであった。年賀状にはクリスマスプレゼントとして贈ったあの地球儀の写真があった。部屋に飾って眺めていることが追記されている。

（良かったあ。）

もちろん、蓮美も年賀状を送っていた。めでたい、と言うことで、

手書きの富士山の年賀状にしていた。それをどう見られているのかと思うと、ドキドキしていた。

珍しく土曜日に休みをもらえ、久しぶりに友達と会ってご飯を食べることにした。その友達・柚華は高校からの友達であるが、高校のときよりも社会人になってからのの方が打ち明けて話せる友達であった。それでも、賢司とのことは一切話していないが。

『で、何があつたのよ？』

柚華はお通しをひと口食べて、いきなり聞いてきた。まどろっこしいことをあまりしない性格ではあるが、あまりに急なので蓮美は驚いてむせてしまった。

『何がって何よ？』

むせが収まってから聞くと、柚華はにやりと笑んだ。

『久々にご飯食べに行こうなんて言われたら、何かあつたからに決まっていると思うわよ。で、どうしたの？』

蓮美はどうしようかと思いつつも、結局蓮との出会いからクリスマスのお出来事まで洗いざらいしゃべる羽目になった。もちろん、自分からと言うよりも柚華が引っ張り出したようなものだが。

『うちに来て何もなし！？』

あけすけな言い方に、蓮美の方が照れた。言った本人はあつけらかんとして、それから首を振った。

『それってまさに脈なしよ。』

ズバリと言われ、蓮美はため息をつく。

『そうかもしれないけど…。』

『ま、諦めて次の恋に進みなさいよ。』

『あ、まだ好きだとは…。！』

今度は柚華がため息をついた。

『あのね、話口調とか表情見てれば、蓮美がその蓮って人を好きなのばればれよ。自覚なし？』

蓮美の頬が徐々に赤くなる。蓮との関係に浮かれているときがある

けれど、好きという恋愛感情に踏み込んでいるとは思っていなかった。だが、他人に言われると妙に照れくさく、そうなのかもしれないと思ってしまう。

（私は蓮さんが好き…？）

1月下旬。お正月はすっかり薄れ、世間ではバレンタインデーの雰囲気包まれていた。そんな頃、真田賢司の会社グループの新年会が開かれた。パーティーなどは藤代社長だけが行くのだが、どうしてか賢司の会社グループからは蓮美にも招待状が毎年きている。毎回衣装代がかさむと思っていたのだが、今回は藤代社長がプレゼントしてくれることとなった。今までないことであり、またこういう馴れ合いになるのはどうかと思ったのだが、ボーナスが弾まなかった分のプレゼントとして買うと言われ、あまりにも乗り気だったので甘えてしまうこととなった。プレゼントといえども藤代社長はサイズも好みもよく分かっているないので2人で買いに行き、決めたのであった。

オフホワイトが基調の、金系の刺繍が入ったドレスは、年齢とも相まって華やかであった。それを着て藤代社長を出迎え、例によって藤代社長の運転する車でホテルに出かけたのだ。

『似合うね。』

試着した際も言ったのだが、藤代社長は改めて褒めた。それに照れつつも頭を下げる。

『ありがとうございます。』

『そろそろ結婚したいとかいう年齢じゃないのか？』

この問いかけには笑みがこぼれてしまう。

『独身の社長からそう言われるとは思いませんでしたけど？』

今度は藤代社長も笑った。

『そうかもな。まあ最近ね、独身もいいけど、家庭を持つのも悪くないなって友達を見ていて思ったんだよ。』

仕事をバリバリこなして、家に帰るなら会社でぎりぎりまで仕事を

するのが好きだと言っていただけに、意外な言葉だ。

『そうですね。でも、まだ分かりませんよ。今は自分だけで手一杯なんですから。』

『それは私もだな。』

苦笑まじりにうなずきながら同意した。

ホテルの正面で車から降り、あとはボーイに頼んで2人で入る。

出来て間もないホテルのフロントは吹き抜けで、古風なエレベーターが昇降するのが見えた。まだ入ったことのないホテルだったので、きよろきよろと見回したくなるが、それをなんとか抑えて落ち着いた表情で歩いた。

『35階のダイヤモンドの間ですよ。』

そう案内してエレベーターに入る。スタッフが35階までノンストップで連れて行き、扉が開くと明るい照明が目に入った。すでに何人か関係者は来ており、受付を済ませている。2人も並んで受付をし、控えの間に案内された。

控えの間にも30人ほど来ており、中には知り合いの社長や役員がいたので挨拶に回る。その間、蓮美はずっと藤代社長の後に付き、必要とあれば藤代社長の名刺を差し出していた。新年会といえども、企業との顔の繋がりを作る場でもある。粗相のないよう、そつのない態度で微笑んでいた。

20分ほど経った頃、ダイヤモンドの間へ誘導された。名前の如く、煌びやかなホールで、とても広い。それでいて、テーブルのセンターフラワーなど、細やかな点まできちんと気配りがされていた。秘書としての立場にいるパーティーはとかく面倒で、必要以上に気を遣い、試練のようなひと時であるが、この場はそれを忘れさせるような雰囲気があった。

新年会が始まり、真田社長や会長、役員の挨拶が済み、ようやく乾杯となった。シュワシュワと軽やかな粒の舞うシャンパンを手にし、掲げる。これだけ多い人数がいるのに、乾杯の声は穏やかに響いた。

『白川君、はぐれないようにね。』

『そこまで子どもじやないはずですけど？』

小さな声で返すと、藤代社長は軽く笑った。

『そうだね。じゃあ少し食べてから挨拶に行こう。』

テーブルに載っているのはどれも見た目がよいものばかり。もちろん、ひと口食べれば味も美味だと分かる。あまり食べるのも良くないが、ほかの客を縫うようにめばしいものを口に入れ、取引先の社長には挨拶をして回った。秘書を連れている社長はおらず、ほとんどが妻を付き添いに行っていた。それだけに蓮美は好奇心な目でも見られたが、気にしていないというそぶりをしていた。

（社長が独身だから、わざわざ私にまで招待をくれたのね。）

今更ながらそれに気付き、自分の立場がおかしく思えた。社長と秘書、という関係だけだと分かっているのは何人いるだろうか。

パーティーが始まって40分もした頃、藤代社長がネクタイを正した。

『そろそろ挨拶に行こう。』

ボーイに使っていたお皿とグラスを渡し、真田社長の方に足を向けた。

今まで色々な人に囲まれていたが、ようやく空いてきた頃の真田社長に声を掛けて、挨拶をする。年明けて、初の顔合わせだ。

『明けましておめでとうございます。』

お互いに口にして頭を下げる。

『去年はお世話になりました。今年もどうぞ、よろしくお願い致します。』

藤代社長と共にお辞儀をすると、賢司はもう頭を上げるように笑いながら藤代社長の肩に手をかけた。

『堅苦しいのはいいですよ。お互い手を組んで仕事することが、ベストですから。お互い様ですよ。ところで、また今日は素敵な美女振りですね。』

賢司が蓮美に微笑みかけて褒める。

『いつもはスーツだけど、こうしてドレスを着ると一段と美しいですね。』

『ありがとうございます。』

関係があつたときにはあまり褒め言葉を公式な場で言われたことがないからか、顔が火照ってしまう。

『真田社長、褒めても我が秘書は譲りませんよ。』

笑つて藤代社長が返すと、賢司はしみじみとうなずいた。

『お若い方同士ほうがお似合いだから、私にはね……。あ、君、写真を頼むよ。』

新年会の記録としている写真係に声を掛け、3人で写真を撮ってもらう。今までも何度か撮ってもらつたが、別れてから初めて撮る写真に蓮美は緊張した。もちろん、装いの態度でいるのだが、それがきちんと出ているかちよつと不安になつたのだ。

（別れてからずいぶん経っているから、大丈夫だね。）

心中を隠し、にこやかに微笑みを浮かべる。

『ありがとうございます。』

『後日、写真を送らせてもらうよ。そうそう、私のあとはついでないが、息子が来ていてね。』

賢司が視線を彷徨わせて息子の姿を探す。

『専属のカメラマンがインフルエンザになつたから、急遽来てもらったんだ。ああ、あそこにいる。』

指差す方には、この新年会の客を撮っているカメラマンがいた。

（え！？）

蓮美はその背中に見覚えがあつた。

（嘘。）

思わず表情が崩れるが、それを慌てて直して微笑を浮かべる。

『プロのカメラマンとして駆け出していてね。RENっていう名前だよっているんだ。』

この説明に、そしてちらりと見える横顔に確信を持った。賢司の息子は、確実に蓮美が知っている、あの蓮だ。

第5章 狭間に揺れて

あのあと、新年会をどう過ごしたかあまり覚えていない。それほどこの事実にはショックを受けていた。

不倫関係であった真田賢司と、親しくしてきた蓮が親子だと知り、白川蓮美の胸中は穏やかになれなかった。蓮と付き合っているわけではなく、ただの友達のような関係だが、親子関係と知ってから近寄りがたかった。それは、いつか不倫関係であることが知られてしまうのではないか、という不安であった。知られてしまい、軽蔑されるのがとても怖かったのだ。

ぐるぐると渦巻くこの不安にいち早く気付いたのは蓮であった。電話中、返事の変化があまりにもおかしかったのだ。だが、真相を打ち明けるわけにもいかず、忙しいという建前でやり過ごしていた。その嘘が見破られたのかどうかは分からないが、それから蓮から連絡は一切来ていない。忙しいから遠慮してくれたのかも、と思うようにしていても、話せない日が重なるにつれて苦しさが積もっていった。

それだけ蓮に対しての気持ちがあった。

街中はバレンタインデーに向けて盛り上がっている。しかしそんなことは目に入らず、蓮美はただ一心不乱に仕事に励んだ。気持ちに踊らせられないためにも。それでもあの衝撃は隠せない。

『白川君？』

ハッとして運転席にいる藤代社長を見る。不安そうな視線とかち合うと、ドキッとして思わずうつむく。だが、呼ばれていたことに気付き、顔を上げる。

『すみません、ボートとしていて。』

そう言うと、藤代社長はおもむろに蓮美の額に手を当てた。

『熱はないようだ。』

社内でインフルエンザが流行しているから、その心配をしたのだ。見当違いに苦笑をもらしそうだが、慌てて引っ込めて頭を下げる。

『大丈夫ですよ。心配していただきありがとうございます。』

『いや、元気ならいいんだよ。』

そう言い、青信号と同時にアクセルを踏んだ。

休日。どこへ行く気も起こらず、何をする気にもならず、ただソファーに横になりながら音楽を聴いていた。大好きなラフマニノフ作曲交響曲第2番もこの憂鬱な気持ちを払ってくれない。

（いつそ魔笛とかレクイエムを聴いて、落ちる所まで落ちようかしら。）

そんな気持ちを持ちながら聴いていると、ふと真田賢司と一緒にコンサートに行ったことを思い出してしまった。しかも、この曲を聴きに行ったのだ。

『ダメだわ。』

慌ててCDを取り出し、CDラックから何か良いものはないかとカカタと音を立てて探し始めた。何の接点もない曲を探すのは難しく、結局ラヴェル作曲のボレロをかけた。

『まさか親子だなんて。』

何度呟いたかも覚えていないくらい、口に出した言葉だった。

（もし不倫していたことがバレたら、蓮さんと顔合わせらんないよ。）

蓮と連絡を取れないことが苦しかった。今後会えないと思うと、ひどく寂しかった。蓮美は柚華に言われた通りの気持ちなのだ。

（蓮さんが好き。）

気持ちはハッキリしたけれど、それを告げる勇気はない。むしろ、父親の次には息子か、という図が見えて嫌なのだ。もちろん、意図したわけではない。

偶然なる運命であつたのかもしれない。

バレンタインの日。蓮美はそれに気付かないくらい仕事に没頭していた。会食のセッティングや納品のチェック、社長以下についている秘書と予定の打ち合わせなど、やることは尽きなかった。この間よりは落ち着いてきたとはいえ、こうして夢中になれることがあってホッとしていた。

秘書室から蓮美以外が全員退勤してからもまだ仕事を続けていた。締切期限はまだまだ先でも、熱心に資料をめくって書類をまとめるその間、バッグの中で携帯電話が気付いてとばかりに鳴らしていたのだが、蓮美は気付かなかった。

9時過ぎ、秘書室のドアがノックされた。
『どうぞ。』

今の時間来るのは警備員かと思いきや、意外にも社長であった。今日は会食があるから夕方見送り、そのまま帰宅となっていたはずである。

『藤代社長？どうしたんですか？』
慌てて立ち上がり、藤代社長に近付く。

『何か緊急なことでも出来たんですか？』

引き締まる蓮美の表情を見て、藤代社長は軽く笑んで手を振った。

『いやいや、何もないよ。ただ、まだ明かりがついていたから不審に思ってたね。まさかまだ仕事をしているとは思わなかったよ。』

『きりがいい所までとと思っていました。』

『そうか。でも、もう遅い。明日にしなさい。詰め込みすぎるのは良くない。』

ここで中断するのは気持ちに揺らぎが出来てしまうが、上司に言われては反論しようもなかった。まして退勤時間はとくに過ぎているのだから。

『はい、分かりました。』

『遅いから送って行こう。』

『ありがとうございます。』

蓮美はデスクに戻り、慌てて必要なものをバッグに入れ、デスクに

鍵を掛けて藤代社長の所に戻ってきた。

『じゃあ行こう。』

電気を消し、先延ばしされた仕事を未練がましく思いながら退室した。

地下駐車場からレクサスに乗って蓮美の家に向かった。渋滞もなく、スイスイと車は進む。

『疲れただろう。何かご飯を食べていくか？』

『家に下準備したのがあるから、大丈夫です。』

本当は何の準備もしていないが、さりと断った。この気持ちのままでは、相手に気を遣わせてばかりになると思ったからだ。それが伝わったのか、藤代社長の眉が顰められた。

『この間から思っているのだが、何か心配事があるのかな？』

『え？』

蓮美は藤代社長を見る。仕事以外は鈍い方である藤代社長からこう言われるのは珍しい。事中なら今までも言われたことはあるが、こうして退社したあとは初めてだ。

『白川君は元々仕事をきちんとこなしてくれるから助かるが、最近は何かに詰めてしているように見えてね。まるで、何かから逃れるように。』

蓮美はすぐに視線を窓の外にやる。痛いところを突かれている。答えないでいると、藤代社長はため息をついた。

『もちろん、君のプライベートに踏み込むつもりはない。ただ、心配なんだよ。』

その心遣いにはありがたかった。だが、この気持ちの原因までは解けるはずがない。もちろん、事の真相を言いたくない。

『心配してくださってありがとうございます。』

口にしたのは、感謝の言葉であった。だが、それにはこれ以上聞かないで欲しいという気持ちもこもっていた。

蓮美のマンションの前で車を止めると、藤代社長はシートベルトをはずし、蓮美の方に身体を向けた。

『何か困っているのであれば、話して欲しい。』

真っ直ぐな視線で見られ、蓮美は不思議とドキドキしてしまった。

『今までにないほど、苦しい表情を浮かべている白川君を見ていると可哀想で仕方ないんだよ。』

上司と部下として今まで何度も相談事はしてきた。だが、ここまで言われたことはない。普段は見ない、熱い思いを見せられたようで蓮美は泣きそうになった。それに藤代社長は気付いていたが、話を続けた。

『白川君、私は君が好きだ。』

突然の、思ってもみない告白。蓮美の中に色々な感情が渦巻き、どうしていいか分からなくて視線が彷徨う。ただ、こぼれそうな涙を堪えるのに必死であった。

『ずっと言わないでおうかと思った。だが、今の白川君を見ていたらもう黙っていられなくてね。』

暖かな視線が蓮美に注がれるが、それを受けることは今の蓮美には出来なかった。うつむいて視線を避ける。

『私は……。』

泣き出さないよう、手をぎゅっと握ってそれを見つめる。

『返事は待つよ。いつだっていい。』

蓮美に無理がないよう、優しく藤代社長は言った。その気遣いは嬉しくもあり、また苦しみのひとつにもなる。もう蓮美の頭はパンクしそうであった。

『分かりました。送ってくださってありがとうございます。失礼します。』

形式的にそう言って車から降りた。いつもなら車を見送るのだが、まったく見ずにマンションに駆け込んだ。そうでもしないと、渦巻く気持ちに閉じ込められてしまいそうであった。

鍵を取り出しながら自分の部屋の玄関を見ると、ドアノブに袋が掛かっているのが見えた。宅急便がこんなことをするはずがなく、不審に思いながら近寄ると、袋にメモが張られていることに気付い

た。この字は蓮の字だ。

『どうして？』

こらえきれず、涙がこぼれる。

思考回路が寸断されるような、それでいてこんがらがって上手く伝わらないような、そんな状態のまま袋を手に取り、中を見る。袋の中にはブーケほどの大きさの花束が入っていた。チューリップの花束は蓮美の瞳に鮮やかに写った。色とりどりのチューリップがこの寒空の下、可憐に蓮美を見上げている。ここだけに春が来たような、そんな花束だ。

メモにはこう書かれていた。

Dear・Hasumi 花言葉を貴女に From・Ren

あれからずっと連絡を取っていなかった愛しい人。その人の字に指を這わせ、何度も読み返す。そのたびに涙がこぼれた。

『蓮さん……。』

蓮美は大事に花束を抱え、冷えた部屋に入る。ふらふらになる思いをしながらテーブルに花束とバッグを置く。そのとき、チューリップのそばにメッセージカードがあることに気付いた。蓮の字ではない。可愛らしい字から見て、花屋さんのサービスのように思えた。それを取り出し、書いてあることに目を通す。

『これって……。』

そのメッセージカードには、花言葉が書かれていた。そこに書かれていた言葉は、く恋の告白、真面目な愛、であつた。

『どうして……。』

そのまま崩れるように座り込み、顔を覆って泣き出した。とめどなく涙はこぼれ、バッグからタオルを出して顔を抑えるが、それでも涙は流れ続けた。

親子の発覚。

思いもよらない告白。

蓮美はどうしても前を見られなかった。

第6章　またここで

バレンタインデーに携帯電話に着信があったのは、真田蓮からであった。プレゼントを置いておくから受け取って欲しい、というだけのメッセージが残されていた。着信時間から見て、そのときに電話で話していれば藤代社長とは何事もなかったと思った。だが、どちらにせよ蓮からの告白だって十分に自分を戸惑わせている。

（好きだけど、ダメだよな。）

このまま連絡を取らなければ、蓮は忘れてくれるのだろうか。

決算前で仕事が忙しくなった。他社との兼ね合いもあり、藤代社長に付き添うことが多くなり、白川蓮美はいつも以上の気を遣っていた。それをどう捉えたのか、藤代社長は秘書を変えようと言い出した。

『私じゃだめですか？』

いつになく厳しい顔をした藤代社長は蓮美の視線から逃れるように窓の外を眺めた。

『そうではない。ただ、苦しめているような気がして嫌なんだ。』

一切プライベートを仕事に持ち込まなかった人がここまで苦悩する姿に、蓮美の方がうろたえてしまう。

『あの、苦しいわけじゃないです。』

沈黙が訪れる。8年目になる社長と秘書の関係が、初めて崩れるような沈黙だ。

心が痛くなるような沈黙から打ち勝つように、蓮美は口を開いた。『私はこの仕事に今まで掛けてきました。だから、続けさせて下さい。』

頭を下げて言うと、藤代社長が振り返る気配がした。

『私はいつまでも待つつもりだ。だから、焦らずに考えて欲しい。困らせたくて言っただけじゃないんだよ。それから、君が私を断っ

ても秘書は続けて欲しい。その点は分かってくれ。それから秘書は……白川君に任そう。』

苦悩を絞り出したような声で言われ、蓮美はいたたまれない思いをしながらもう一度頭を下げた。

藤代社長に告白されたのは驚きのひと言に尽きるが、蓮美の気持ちは決まっている。ただ、蓮とこのまま何もなれないと思うと、藤代社長に付いた方が安心するのでは、とも思っていた。

悶々とした日が続き、それから抜け出さなくて柚華とご飯を食べることにした。今回も柚華は明け透けに聞いてきた。

『あの人に告白したわけ？』

『そうじゃないの。』

『じゃあ何？もしかして、実は脈ありだったってわけ！？』
意外そのものを声に出したように言われ、慌てて首を振る。

『気持ちの上では大変なの！』

柚華の妄想の暴走を止めるため声を大きくして言うと、呆氣にとられ、それから肩をすくめた。

『なんか訳ありね。』

静かな問いかけに柚華が聴く姿勢になったと見え、2人から告白されたことを話した。

『それって、社長夫人になれるじゃん！』

たちまちミィハーな部分を出してきたが、蓮美の様子を見て柚華は舌をぺろつと出して失言を認めた。

『社長についていけば、この先安泰だよ。でも、気持ちはない。』
蓮美はうなずく。藤代社長の敏腕ぶりに尊敬の念を持っていたが、恋愛の感情はまったく考えていなかった。

『蓮って人についていけば、気持ちはあるけど、写真家だからこの先不安かもねえ。』

28歳にもなると、やはり結婚の文字が浮かんてしまう。だからこそ、こういう先行きを柚華は気に掛けていた。しかし、自分でこう

いう比べ方をしたのだが、氣に入らないように首を振った。

『やっぱり気持ちでしょ。』

『そう思う?』

柚華は梅酒をゴクリとのみ、揚げ出し豆腐を頬張った。

『よく言うつあれよ。お金のないイケメンと、お金持ちのブ男。どっちがいいかってやつじゃない?』

『気持ちが入ってないじゃない?』

『お金を気持ちに入れ替えてみれば一緒でしょ。』

『どっちも容姿はいいと思うけど。』

柚華は眉を顰めて睨んでくる。

『悩んでいる割には冷静なツツコミね。』

『だって。』

『だってじゃないわよー。蓮美、気持ちはどっちにあるのよ?』
その答えは決まっている。

『蓮さん。』

『じゃあ、やっぱり社長夫人は魅力でもそっちは断るべきよ。気持ちがないのは続かないわ。』

『そーだけど。』

『それに、蓮って人から告白されて、蓮美も好きなんですよ。こっちは丸く収まるんだから、悩む必要なんてないわよ。』

蓮美は視線を落とす。確かになんの事情もなければ、悩まずに蓮の胸に飛び込んでいただろう。だが、蓮の父・賢司との関係があつたから、そんな素直な気持ちにはなれないのだ。悩んでいる蓮美を見て、柚華は首をひねる。

『気持ちに通じているのに、何が文句あるのよ?』

『文句って言うか……。』

頭の中で、賢司との不倫関係を言うかどうか悩んだが、言うべきではないと思って首振った。

『彼の父親がね、うちと取引している会社の社長さんなの。』
それだけ言つと、柚華の目と口が丸くなった。

『どっちにしる社長夫人ってわけ！？』

『あのねえ、蓮さんは継いでないの。だからそれはなし。もう。そこから離れてよ。元々私は社長夫人なんて興味ないんだから。』

『あーはいはい、そうだったわね。えーっと、取引先の社長の息子だつてことでしょ。そんなん気にする必要ないじゃん。会社と結婚するわけじゃないんだし。』

『そうなんだけどね。』

そこで店員に時間だと言われ、しっくりしない気持ちのまま会計をして店を出た。

駅までの道、複雑な気持ちのまま柚華の横を歩き、この先をどうするか考えていた。すると、柚華は蓮美の頭を撫でてきた。

『気持ちに通じているってすごく素敵じゃん。羨ましいいよ。』

『柚華？』

『私はね、まだあの人のことが好きなの。かれこれ6年も経つていうのにね。だから、こうしてちゃんと気持ちに通じた蓮美たちが羨ましいのよ。』

寂しげな声に、蓮美は胸をきゅっと掴まれたように切なくなった。

『不安な点はあっても、気持ちを殺しちゃダメだよ。』

柚華はそう言い、また蓮美の頭を撫でた。

翌日。蓮美は朝からずっと緊張していた。退勤後、藤代社長に話をするからだ。柚華と話すことで、藤代社長に対して心が決まったのだ。

あつという間に1日が過ぎ、退勤となった。あらかじめ話をしたいと告げていたので、社長室で待っていてくれた。

『私、色々と考えたんです。』

そう切り出すと、藤代社長は蓮美の緊張が伝わったように座り直して背筋を伸ばした。

『藤代社長のことは尊敬しています。一緒に仕事が出来て、サポートが出来て、幸せだと思っています。ただ、恋愛としてはどうして

も見えなくて。』

蓮美は藤代社長の失望した顔を見たくなくて、うつむいた。だが、ハッキリと言うべきだと思い、思い切って顔を上げる。すると、意外にも藤代社長は穏やかな表情を浮かべていた。

『ありがとう、たくさん考えてくれて。』

『いえ、そんな。気持ちにお応え出来なくて申し訳ないと思って。』

『じゃあ、申し訳ないからって付き合う？』

呆氣にとられ、それから首を横に振った。

『人の気持ちってそういうものなんだよね。返事をありがとう。これから、秘書として支えて欲しい。もちろん、白川君が誰かと結婚したら盛大に祝おう。』

ちよつと老けたように見え、それでいて少年っぽさが垣間見えた。そんな雰囲気を持つ社長にお礼を言って頭を下げた。

次の休日、蓮美はあの喫茶店に行った。いつものようにカウンタ―に座り、マスターが丁寧に入れてくれる珈琲を待つ。

『どうぞ。』

差し出された珈琲をひと口のみ、ほつとひと息を付く。家で飲む珈琲より落ち着いた。それが伝わったのかマスターは微笑みながら下がった。

本を読むこともなく、ただぼんやりと珈琲を飲みながら時を過ごす。何も考えない時間が心地良かった。

静かな時を壊すように、喫茶店のドアが荒々しく開けられた。あまりの音に驚いて見ると、さらに驚いた。

『蓮さん。』

慌てて入ってきたのは蓮で、すぐに蓮美の横に座った。蓮美はどうしようと思ひ、出て行くべきと思ってバッグに手を伸ばすが、それを阻まれてしまった。

『話がしたい。』

あまりに真剣な声で、抗えることはなかった。

蓮にも珈琲とドーナツが差し出された。

『マスター、色々ありがとう。』

『どういたしまして。良かったですね、逢えて。』

それだけ言って穏やかな笑みを浮かべて下がったマスターを、蓮美は不思議そうに見た。

『どうしても連絡したくて。だけど家に行くのは悪いと思ったから、ここに来たら連絡して貰うように頼んだんだ。』

その必死な想いが伝わり、蓮美は泣き出しそうになった。

『花束は受け取ってくれた？』

蓮の顔を見ずにうなずく。すると横からホツとするため息が聞こえた。

『良かった。』

『でも、良い返事なんて出来ないの。』

苦しみながら搾り出すように言くと、蓮の表情が強張るのが分かった。

『そりやこれだけ連絡くれなかったしね。貰ってくれただけでも嬉しいけど。』

『違うの。』

あまりにきつぱりした声だったので、今度は蓮が不思議そうに見た。

『私はダメなの。』

『どうして？』

『ダメなものはダメなの。』

賢司との不倫は口に出来ない。それを知られて嫌われたくないのだ。しかし、この答えでは蓮が納得するわけがない。蓮美が誰かと結婚、あるいは婚約しているなら分かるが、その事実はない。それなのにここまで拒絶するのなら、きちんとした答え欲しい。

仕方なしに蓮は写真を2枚出した。それを見て蓮美はドキッとす。あの新年会の写真だ。1枚は賢司と藤代社長の3人で写っているもの。もう1枚はほかの社長と話しているところだ。

『親父と知り合いだからダメって事？』

首を横に振ると、蓮は眉を顰めた。

『じゃあ、聞きたくないけど。親父と何かあった？』

蓮美の表情が強張る。1番触れて欲しくないことだ。

『蓮美さんの表情が全然違うんだよね。親父と写っているのだけは作ったような、強張った笑顔で。ほかの写真は全部自然と笑っているのに。』

あのときの不安がにじみ出てしまった。出したいと思っていたのに、隠せなかったのだ。

帳消し出来るわけもない。だからといって、事実を言いたくもない。

黙って写真を見つめる蓮美に、蓮は話しかけた。

『親父と何もなくても、何かあったとしても、僕は気にしない。心配になるかもしれないけど、気にしない。僕は蓮美が好きだから。』

写真を仕分けていたとき、蓮美の笑顔の差に気付き、様子がおかしい原因ではないかと思ったのだ。だが、おそらく過去のことであり、戻ることがないならば、これからを見ようと思った。だから、あの花言葉を贈ったのである。

なにがあるかと真面目な愛を贈る。

蓮美はその想いに気付き、思わず泣き出した。涙が頬を伝い、それを見て蓮はミニタオルを渡した。蓮美はそれを受け取り、目頭を押さえる。

真相は分からなくても、何かに気付かれてしまったことには壊れるような思いをした。しかしそれ以上に、穏やかで温かい気持ちを伝えてくれ、包み込んでくれるような蓮に感謝がいっぱい募った。

『本当に気にしない？』

『過去を変えることは出来ないから。これからを見ればいい。』

きっぱり言う蓮。蓮美は顔を上げ、泣いた赤い目で蓮を見る。

『私で良かったの？』

『じゃなきゃ告白なんてしないよ。』

『でも……。』

蓮はもどかしい気持ちのまま、蓮美の顔に手を添えた。

『僕は蓮美が好きなんだけど、蓮美は？』

こんな間近で目を合わせて言うのはあからさまな気もするが、蓮に限ってそれはないと思った。これが彼の自然な姿なのだろう。

（ずるい。）

『好き。』

ずっと胸に秘めていて、ようやく言えた大切な言葉。

蓮は穏やかに微笑み、それから蓮美とキスをした。珈琲を飲んでいたのに、ほろ苦さはなく、なぜか甘い。

またここから始まった恋愛。まさか彼らが親子とも思わなかったが、その不安はこれからもっと薄く、次第に消えていくだろう。そう思えるものが蓮にはあった。

先月からの苦しみは消し去り、蓮美は安心して前を見られた。

蓮美と蓮はマスターに会計を済ませながらお礼を言い、それから春先の薄い青の空の下を歩き始めた。

ここからスタート。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0212f/>

珈琲

2011年1月22日02時48分発行